

Title	マイネッケ史學の根柢についての一考察：その発展思想について
Sub Title	On the fundamental principles of F. Meinecke's historical thought
Author	米田, 治(Yoneda, Osamu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.30, No.4 (1958. 3) ,p.75(493)- 96(514)
JaLC DOI	
Abstract	I consider "Development" and "Individuality" two fundamental principles in F. Meinecke's view of History. As "Individuality", the latter concept, having been studied in the previous issue of "Historical Sciences " (史學), I have intended here to discuss "Development" and explain how these two concepts are united in Meinecke's thought. As I referred in the preceding article, "Individuality" is of the immanent character, and it can be grasped only by means of intuition (or prerecognition Ahnung), not by means of experience nor by logical thinking. The question, therefore, lies in how we can unite these opposite concepts. From careful examination of his concept of "Individuality", we may conclude that these opposite concepts could be brought to unity through "Individualization" of development, which is only possible through the medium of "Personalisation". Meinecke inherited this principle of "Personalisation" from German Romanticism. The Universal History, conceived as ultimate aspect of historical development, can be individualised. Thus the principle of "Individuality" is kept consequent throughout Meinecke's thought on History, its apparent contradiction being cleared out through the application of the concept "Personalization".
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0075">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19580300-0075</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## マイネツケ史學の根柢についての一考察

——その發展思想について——

米 田 治

學問も亦歴史的なものである。この表現が過大に失するなら、學問も歴史の試煉の火を免れ得ないと換言してもよからう。とすれば一時代の轉換期たる現代において、學問のあり方についての根本的な問があらゆる學問に發せられなければならない。就中歴史學はかような問を最も深く感受しなければならぬ學問の一つである。何故ならその學問的基礎の曖昧さと薄弱さにおいて、歴史學は他の科學に比しはるかに多くの弱點を有するからである。この問を更に推し進めて行く時、従來の歴史學の根柢にあつた歴史主義の檢討へと行きつかざるを得ない。しかしここにおいて歴史學の學的成立の根據という大問題を検討しようというのではない。ただかような問題に苦斗したマイネツケという一歴史家の足跡を、しかもその極く限られた一面を辿つて見たいのである。

筆者はかつてこの歴史家を取上げて、彼の史學の根本前提の一たる個體概念について論じたことがあつた。ここではもう一つの前提たる發展概念を檢討し、彼の史學に關する統一像を構成したいと思う。何故なら、筆者が先に取上げた個體において——それは彼の史學の中心をなすものであり、又その第一原理でもあるが——到達した結論によるなら、個體の核心をなす個體性とは直感的、予感的方法によつてのみ把握し得られ、經驗的、論理的方法によつては到達し得

ない内的實在として個體の最内奥にあり、歴史の發展の動相 (Dynamik) から最も隔つた場に置かれてゐるものであつたから。しかも彼は、「あらゆる歴史的な生は發展するものであり、發展思想の歴史學への適用は近代歴史學の主要特色であるとは、我々の見解であつた<sup>(2)</sup>」と、又「個體性の概念と發展概念とは歴史的思惟において密接に關連して居り、<sup>(3)</sup>」發展思想も亦かような個體性に關する深い理解によつて始めて正しい軌道にのることができた<sup>(4)</sup>」<sup>(4)</sup>と云うのである。この二つの契機が相會し、統一せられてゐるのは如何なる點においてであるか。この兩者の統一像を構成することによつて彼の史學を首尾一貫して把握したい、そして以上之間に何らかの形で答えたい、このことが本稿で所期するものなのである。

先づ論を進める爲の手がかりとして、發展概念についての彼の次のような定義から出發しよう。「個體性の概念と發展概念とは歴史的思惟において密接に關連し合つてゐる。これを詳言するなら、歴史的個體性の概念は存在し得る多様な發展概念から、一つの完全に規定せられた發展概念を補足するものとして要請する。即ちかような發展概念とは、單なる生物的植物的發展の特色、即ち生得的傾向に従う單なる展開 (eine blossen Entfaltung nach angeborener Tendenz) とかう特色に、更に發展するものとその可塑的變化能力の精神的自發性の特色を (die Merkmale der geistigen Spontaneität des sich entwickelnden und seiner plastischen Wandlungsfähigkeit) 單一的諸要因の影響の下に (unter dem Einflusse singulärer Faktoren) つけ加える。それ故自由と必然とは到るところで分離し難く混融してゐるのが見られる。<sup>(5)</sup>」我々はこの定義においてマイネツケの發展概念についての包括的定義を持つ。そしてこの定義から次の三つの基本的要素を取出すことができる。

1. 生得的傾向の契機
2. 精神的自發性の契機
3. 單一的(外的)諸要因の影響

これら三つの契機を比較検討することにより彼の歴史的発展の概念の核心へのアプローチを試みよう。しかし予め指摘しておきたいことは、これら三の契機が分ち難く結合していることである。それ故これら三つの契機に分けて考察するのもあくまでも便宜的なものにすぎず、最終的には綜合せられてより高次なものに高められねばならぬものなのである。先づ第一の契機を取上げよう。この契機は、生物的植物的發展、即ち生得的傾向の展開であるから、何らかの意味において、個體の内部に發展すべき胚芽的なものの内在を前提とする。そしてこの個體に内在する胚芽的要素は、自らに固有な構造と合目的性、合法則性とを有する生物體にまで發展して行くものであり、そのような發展は、その發展以前にその胚芽的に内在する要素それ自身において、その個體の發展の全過程が先取されている。換言すれば、かような個體の發展は、その胚芽、その萌芽のうちに將來成長發展すべきものを潜在的に含んで居り、それが一定の法則に従つて必然的に展開し、何ら新たな要素が加わることはない。丁度捲込まれ疊み込まれ、包み隠されてあつたものが、解きほぐされて行くことによつて露わになり、顯在的になつて行くが如きである。それ故發展(Entwicklung)ではなく展開(Entfaltung od. Abrollen)なのであり、マイネツケ自身も「展開」との表現を用いてこれを表わし、發展と區別しているものなのである。<sup>(6)</sup>この第一の契機のみを以つて歴史を一元化したものが有機體的生命史觀とでも言われるべきであらう。

ここでシュペングラーの發展概念が問題となる。彼の發展概念は、マイネッケのそれと同じくドイツ歴史學派、ドイツロマン派の有機體思想に由來するものであるが、シュペングラーのそれはマイネッケの表現によれば、「より多く有機的なものに向けられている傾向の最たるものであり、その傾向は僭越にも、一切の史的現象をば個々の大なる文化の種々な生物的形成法則から説明せんと企圖し、<sup>(7)</sup>「歴史的個體の成立と、生命と、經過とをそれに固有な内的生<sup>(7)</sup>及び生長法則から説明するランケ及びロマン主義者たちの教説を、生物的なもの及び植物的なものへ解釋し直した<sup>(8)</sup>」ものであり、正に發展概念ではなくして單なる展開概念なのである。

かくして、かような生物的、生得的傾向の發展、即ち展開は必然的なのであつて自由ではない。むしろこの必然的な合目的性による發展の法則性を斷ち切るところにこそ、マイネッケのいわゆる本來的意味における發展が存するのであり、個體の自由と創造による個體の眞の發展がある。

「歴史的發展は、價値に従つて行動する人間の自發的要素が干與し、それで以つて何らかの獨自性と單一性が創造されたとき、始めて起るのである。それによつて歴史的個體は發展し、歴史的に發展するもの、それはただいつも個體性のみであり、發展によつてのみ個體性は自らをあらわすのである。<sup>(9)</sup>」又「發展の原理にして法則、それは個體性の核心にして獨自的に個體性を構成する契機たるイデーであり、<sup>(10)</sup>それは「生命の原理でもある。<sup>(11)</sup>」これこそ冒頭の定義の第二の契機であり、この第二のものこそ彼の發展概念の核心をなすものであることが窺えよう。それ故次に、發展の原理にして法則であり、創造的核心であるイデーを分析し、イデーの發展を追求して行こう。

彼のイデーは同時にまた生命の原理でもあり、それ故個體に内在するものであつた。即ち彼は、「必然と自由とを結び

つてつ、一の状態から他の状態へと移り行く内的な、即物的な衝動力 (die innere sachlichen Triebkräfte) を純正な歴史的発展の規準<sup>(12)</sup>と観取する。生命の原理であり衝動力であるこのイデーは、内在性 (Immanenz) をその本質的性格として所有する。だがイデーが個體に内在する存在でありつつ、しかも発展の原理であるとは如何なることであらうか。即ちイデーが内在的な発展の原理となり、同時に發展して行く個體の前を照らし出す理想 (Ideal) に如何にしてなり得るか。成程シュペングラーの立場に立ち、生物的有機體的發展概念にて首尾一貫すれば、内在的發展は恐らく可能であらう。だがマイネッケはこの立場を却ける。そして自發性の概念を提出して、「idealistisch な色彩を帯びた、個的獨目的な文化價値<sup>(13)</sup>」について語り、「善なるもの、美なるもの眞なるものへの何らかの傾向の個體内在<sup>(14)</sup>」を言うのである。個體内在のかような傾向を彼がイデーと稱するなら、イデーはすでに現實の個體に内在し、存在するものであり、その具現、現實化は、何ら自發性による創造でもなく、又自由なる行爲の成果でもない。

イデーの存在とその自己具現とを主張するのは客觀的觀念論の根本的特色である。ヘルダー、やマイネッケが自らの師と仰ぐランケ、ゲーテが特にそうである。だがその場合、イデーが自らの有するイデアールな内容を流出させ、それで以つて現實を充溢させ、現實をイデーへと引上げるといふ形をとる。即ちイデーと現實との二元論という形をとつて發展が行はれる。それ故論理的に首尾一貫した二元論は、イデーを内在的な發展の原理となし得ない。イデーが現實の個體に浸透して始めて發展の原理たり得るのである。

それ故發展の原理としてのイデーの内在性を言うマイネッケの論理は首尾一貫した齊合性を持たない。彼が歴史の主體となした歴史的個體の核心にして發展の原理たる個體性を生命であると同時にイデーであると規定したとき、それに

シュペンゲラー的、有機體的、汎生物主義的一元論と、觀念論的二元論とを矛盾した形で併有したことになる。我々は前者において超越的、形而上學的根柢を喪失した結果、その姿を露呈して來た有機體的生命史觀を認識し、後者においてかような生命史觀を克服せんとして、單調にして無意味な、むしろ有機體的生命史觀的なものとしても把握し得るような歴史の過程から意味を見出さんとする彼の熾烈な倫理的努力を認識するのである。だが彼には目的論的歴史把握において歴史に意味を見出そうとする試みは、もはや不可能であるように思はれる。又彼の畏敬する導きの師ランケの客觀論的觀念論にもとまり得ない。<sup>(15)</sup> 新たな道を彼は求める、歴史の水平的發展の方向においてではなく、「垂直的方向において。」<sup>(16)</sup> 歴史における垂直的方向への努力を彼は言うが、又生命の原理もあくまでその存在を主張する。イデーと現實、超越と内在、自由と必然、價值と因果、これら一連の二律背反が解消せられることなく混融し、そこに獨特の陰影が湛えられている。そして最終的明確さには容易に到達し難い様に思はれる。だがここで見出した「垂直的高みへ向はんとする努力」これを彼の歴史的個體性の歴史において取らんとする重要な *orientation* として大切に保持しよう。ここにおいてマイネッケの發展思想を追求して來た我々の課題は、この水平的な *orientation* と垂直的な *orientation*、この兩者の交錯を如何に理解するかに集中されて來る。そして冒頭の定義の第二の契機たる自發性は垂直的 *orientation* にて表現され、第一の生得的必然的契機と—先走つて言うなら—第三の契機が水平的 *orientation* にて表現せられるが故、更に第三の契機が取上げられ、検討せられねばならぬ。

「單一的諸要因の影響」即ち「外的環境的諸要因の影響」で以つて歴史的發展を一元化するならば、それはランプレヒトの發展概念であり、マイネッケがこの第三の契機について言及するとき、ランプレヒト的な集合主義 (*Kollektivi-*

vismus)、實證主義が念頭にあつた。それは「本來個人というものをば、ただ種々の社會的力の交叉點及び通過點として看做さないものであり、……進歩や發展は個々の人間の事情ではなくして、むしろ外的な生活諸關係の變化にすぎないことになり、……個々の人間は、一般的諸關係や傾向の指標であるにすぎなくなる。」<sup>(17)</sup>それ故この立場よりすれば、「恰も自由な、そして比較を絶する個性である如く見えるものも、むしろ環境によつて作り上げられたものであり、またこれをつくり上げる一切の材料も環境に由來する」<sup>(18)</sup>こととなる。歴史學の志すべきものは、精神的なもの、個別的なものの把握に存せずして、一般的なもの、集合的なものの把握であり、因果律的把握でなければならぬとされる。即ち集團の關連の發展を把握し、論證し、表現することである。

かような集合主義に對する彼の拒否的態度は、彼の學的生活の初期におけるランプレヒトとのいわゆる「方法論争」<sup>(19)</sup>以來一貫しているものであるが、後期の名著「歴史主義の成立」において、そのような拒否的態度をヴィコに關して次の如く言つている。「ヴィコは、民族という類型の發展を教えたが、個體性の發展を教えなかつた。」<sup>(20)</sup>それ故マイネッケは、近代的歴史思想の先驅者としてのヴィコの性格を規定して、「ヴィコは近代的實證主義、集合主義の先驅者であつたが、又類型的なものの發展をより豊かで、より複雑な發展像において受容した限りにおいてのみ、歴史主義の先驅者であつた」<sup>(21)</sup>という。「より豊かでより複雑な發展像、」彼はこれを個體的發展像とでも言いたいところであらう。だがそのように表現し得ないところに、ヴィコの歴史主義の先驅者としての限界を、彼は考へるのである。

かくその初期から後期に到るまで、集團的要素、類型的なもの、(das Allgemeine) による歴史の一元化の拒否は一貫しているが、その初期にあつては未だ彼の發展理論を積極的に打出すに到らずその後期において始め



て彼自らの發展理論が展開されて行つた。それ故、後期において再びこの一般的なるものが再び取上げられたとき、その基本的態度は崩されてはいないが、それは獨特の陰影を帯びて現われて来る。

個別的人間の個的行為によつてもたらされた自發性の契機の中へ、一般的要因が入り來り、個體の歴史的發展に共働する。この一般的、環境的要因、それはより小なるものを取捲く一般的なるもの、全體なるもの (das Ganze) として表現される。冒頭の定義の第一契機と第二の契機、これは基本的には個別的個人としての個體の問題として語ることが可能であつた。勿論この場合超越の問題も關連して來るが、それは個と超越者との問題として歴史の垂直的次元において現われて來るものであるが、この環境的なもの、一般的なものを取上げることによつて、歴史の水平的次元の問題を取扱わねばならない。それは個別的人間を取捲く一切のもの、時間的意味においても、空間的意味においても個體を圍繞する全體、社會、民族、國家等々……、それらのものの過去から現在に到るまでのつながり、傳統など、これらすべてが、一般的、環境的要因として總括されているのである。第三の契機の定義における「單一的」(singularer)なる表現は、個體の自發性と生得的傾向を條件づける諸要因を單一的に總括するものを表わそうとしているのであり、それは外的環境の全體に外ならない。「歴史における行為の原因と條件とを正確に區分することは、最も困難な、個々の場合にはしばしば解き得ざる研究者の課題である。前景において觀るならば、つねに行爲する人間が變化する原因であることは確かである。しかし、その行為する人の獨自な魂及び彼の目的選擇において、原因的に、單に條件としてでなく、過去から由來する無数の傳統が入り込み、作用している(傍點筆者)。彼自身の固有の自發性は、この原因に新しきものを添加しはする。しかし我々が、創造的人格の參加を歴史の發展に高々とかけけるにせよ、何時その創造的人格は、絶

對に新たなるものを創造したか。」<sup>(22)</sup>かようにここでは彼は、自發性の契機の過度の強調を避け、むしろ環境的、一般的なるものの要因が強くにじみ出る。それは個的なものの自發性を押流し、「人間からその根を奪い去り、且つ人間をして歴史的生の全流動中の單なる一機能にすぎぬものに墮せしめんとする」<sup>(23)</sup>ものであり、「歴史的生の動相」<sup>(24)</sup>とよばれるものである。個的なものに對する一般的なものの強調、これこそ一昔前ランプレヒトとの論争において、彼の敵手ランプレヒトが取つた立場であつた。だがこの兩者の「一般的なもの」は何と異つてのことだらう。同じ一般的なものの強調を言うにせよ、ランプレヒトの場合は、むしろ歴史の全體過程の一斷面における空間的擴がり、空間的環境が重點であるに比し、マイネッケの場合は、歴史の全體過程における過去から現在へのつながり、敢えて言うなら、時間的環境とでも言うべきものに重點がある。それ故それは連續性 (Kontinuität) と稱するのが妥當であらう。この連續性を要約して語るなら、「一般的なるものの原理形式であり、あらゆる個體を自らの中に受け容れ、包容しつつ押流して行く壓倒的な生成の流れを強調する。それは過去による現在の大中な決定を示す。それ故それは、一般的な歴史發展の破壊し得ざる關連に對抗する個別的個體の意志、個體の生命の無力を信ずる。それは、革命の原理に對抗する傳統の原理である。」<sup>(25)</sup>マイネッケの言を以て語るなら、「連續的な、目的に向けられた生命關連 (Lebenszusammenhang) の存在を我々は語り得る。成程それは、志向せられた目的において交代、變化し、一の目的から他の目的へと移り行く。しかし前の目的と後の目的との間に關連が存在する。……成長し行く萌芽における生命關連は、たとえ從來の方向を拒否し、新しき方向へ道を開いて行くにせよ、中斷せられない。古き道より新たなる道へと進むにせよ、飛躍しているのではない。」<sup>(26)</sup>かように理解せられた連續性の概念は、マイネッケも承認している如く、たしかに發展概念の基盤ではあつたが、發

展概念そのものではなかつた。反つて連続性の契機のみならば、それはあらゆるものの生成と流動—マイネッケが好んで引用した表現によれば、ヘラクリットの言葉「萬物は流轉する、」ゲーテの「詩と眞實」の結語「何處へ行くか誰が知らう、何處から來たのかさえも思い出せないのだ、」—であり、正に歴史の水平的次元にのみ關係しているものとして、これこそ彼が發展概念において克服せんとした當のものなのである。

だがこの契機は他方では一般的なものの作用原理 (Wirkungsprinzip) として、個別的個體を歴史的總體の中に織り込み、單なる個體を複雑にして包括的な全體性へと引き入れる。この點においても先において區別した發展概念と展開概念との差違が存するのであり、前者は、全體の關連を考慮に入れるが、後者は、孤立した過程として何ら外的、一般的なるものの影響をうけず、全體の中へ編み込まれず、隔離されたその成長過程において、萌芽的潜在的に有していたものを顯在的な存在 (explizierten Existenz) として明らかに現わして行くことである。

この契機によつて發展概念の中に導入せられたものは總體性のカテゴリーである。個別的個體を取巻く全體、一の個別的個體から他の個別的個體へ、個別的個體から國家、民族社會等々のより大なる歴史的形成物へ、更により大なるものへ……と無限にからみ合い、交錯し合う生關連、因果關連の連鎖、かように水平的次元に無邊際に擴大して行くその窮極のものとして、世界史全體そのものに到達するのである。

私は、先にマイネッケの發展概念を水平的な orientation と垂直的 orientation に換元したが、ここにおいて前者からその窮極的なものとして世界史全體を、後者から個別的個體の最内奥のものとしての自發性、自由の契機を抽象し得る。そして彼の歴史的發展についての統一像をもたらそうとするならば、この両者が綜合せられねばならぬ。その

爲には一つの媒介概念を必要とする。即ち超個體的、客觀的個體性という概念が。

マイネッケによれば、「個體性」の思想とは、創造的歴史的人格に對する感覺(Sinn)であるのみならず、歴史的形成物一般であり、<sup>(27)</sup>又「歴史主義とは超個體的諸力に内在する個體性に對する、就中國家の超個體的體制に内在する個體性に對する感覺<sup>(28)</sup>」であつた。彼は根本原理の前提として個體性の原理をおく。それは言うまでもなく個別的個人の主觀的人格の實在に對する直觀行爲より出發する。そしてこの人格を個體の核心たる個體性となし、この個別的人格とのアナロジーにおいて、國家、社會、民族、宗教、文化等々の超個體的、客觀的歴史的形成物にも人格即ち個體性を感受し、かようにして見出された個體性を超個體的形成物の核心となすことにより、超個體的形成物の實在を承認する。かような方法はO・ヒンツエの批判を挨つまでもなく、一種の擬人化(Personifikation)<sup>(29)</sup>という極めて素朴な、しかし人間の精神の最も強力な衝動よりなされていることは論ずるまでもない。このように「個體性の思想を超個體的なものに適用的ることにより、個別的個體のみならず超個體的な歴史上の諸々の聚合體、即ち諸國家、諸民族、諸宗教、あらゆる文化現象全般否全文化も亦個體性なのである。」<sup>(30)</sup>その故マイネッケの歴史主義の包括的定義として次の如く言うことができる。「歴史主義の個體性思想は人間の魂の個體性から出發し、その人間の魂によつて創造せられたる人間の形成物や共同體をも—たとえそれらが如何に類型的なものを持つていようとも—同時につねに個體的なものとして觀、個々の人間が、かような形成物、より高次な共同體により圍繞せられ、それらによつて、又それらとの交互作用において成長、發展するのを觀んとするものである。」<sup>(31)</sup>このようにして個體性思想による歴史的生の總體の把握も可能となる。そして「世界史の第一の課題を……歴史上の個別的人間より始めて、大なる總體文化に到るまでの段階構造(Stufenbau)を觀

ずることに歸せられる」<sup>(32)</sup>ならば、個別的個體の、より高次な共同體、人間の超個體的な形成物との交互作用による成長、發展は、個別的個體からより高次な共同體、超個體的個體への段階的成長、發展と考えられてくる。

マイネッケ史學の最も根本的にして最高の原理は、個體性の原理であつた。この原理を以つて一貫し、徹し切るならば、個體性から個體性への如何なる發展も認めることができないし、歴史は、數多の個體性より成る多元論的立場を取らざるを得ない。何故なら、個體性から個體性への發展を承認するなら、前の個體性は、何らの意味において後の個體性の手段となり、その個體性それ自身の獨自的價值、何物を以つてしても換え難き價值——これこそ個體性の本質なのであるが——を喪失するからである。だがマイネッケは、「個體性から個體性への如何なる發展も存しない」との見解に反對を表明する<sup>(33)</sup>。そして「それぞれの個體性は、より高次の個體性の中へと包容されているものであり、且つこのより高次の個體性の内部で起る發展は、相互に別々に發展して來た具體的な諸々の個體性をも亦、精神的な糸によつて相互に結び合はせるものなのである」<sup>(34)</sup>。しかし個別的個體からより高次な超個體的個體への發展は、直線的、圖式的なものでもなければ、またより高次の超個體的個體は、個別的個體の單なる合成、集積でもない。そうであるならば、前者を形成しているすべての後者を除去するなら、超個體的個體は消失するであらう。そしてまた「不可置換的」<sup>(35)</sup>、「根絶し難きものとしての個體性」<sup>(33)</sup>に値しないであらう。超個體的個體も個體性である限り、「それ自身一箇の全體性 (Ganzheit)」<sup>(37)</sup>であり、部分を寄ち集めた單なる總計ではなく、因果關連そのものでもなく、そのままの存在において、それだけで一者 (schlechthin Eines) なのである。個別的個體と超個體的個との關係を、彼は次のように論理的にではなく、寓意的、

象徴的に表現するのであり、またそのようにしか表現できないのである。即ち「個別的個體は、客觀的精神の無數の形成物（筆者註、超體的個體を指す）の切點であるのみならず、水源でもある。そしてその源から無數の水滴が流出し、最後にはそれら無數の水滴が合して大いなる歴史の流れとなる。その大なる流こそ大いなる個別的統一體として我々に出現し得るものなのである。」<sup>(38)</sup>

マイネッケは、個別的個體を超體的個體に完全に歸屬させることなく、又超體的個體を個別的個體に從屬させもしない。そして超體的個體の最高、最大のものへとその段階構造を辿つて行き、これを抽象して普遍と稱するなら、一方に個を他方に普遍の錘りを載せた天秤の秤皿が微妙な平衡を保ちながら、ある時は一方に、ある時は他方に傾きつつ、動搖しているのに譬えようか。だが時の経過とともに、普遍の秤皿が日ましに重くなりつつある、しかも決定的に上へは上ることもなく。

「謂わばランケの意味に理解された世界史―我々は二三の訂正と留保をなしつつ今尙これを代表し得るのであるが、かような世界史―も亦ただ大きささまざまな無數の個體性の充滿している唯一つの、大いなる個體性に外ならないのである。この歴史の有する一切の文化價值は、同時に歴史的個體である。そしてそれは、その時々に応じてより高次の個體性―その最高のものは、最高の個體性たる世界史であるが―に包み込まれているのであつて、この故にそれは世界史的關連においてのみ完全に理解され得るものなのである。」<sup>(39)</sup>これによればマイネッケの個體化的方法、個別的個體性の超體的個體性への適用、轉移 (Übertragung) は、世界史そのものにまで及ぼされ、擴大されたことを知る。そしてその

時個別的個體より始つてより高次な超個體的個體へ、更に個體化せられた世界史へと發展する段階構造を彼は腦裡に描いていたと推察できる。ここでこの世界史という表現を普遍と置き換えたら、個體化された世界史を個體化された普遍と稱し得よう。

「發展するということは、個別的人間の有する靈妙な能力 (Charisma) である。そして彼に魂の健全さと自己認識とが賦與されているなら、彼に固有の生命法則によつても、又彼に伝えられる無数の過去の生命法則や、かの客觀的精神の形成物によつても有益に導かれるのを彼は感ずるであらう。だが同時に責任の意識を、限定されてはいるが彼にはしばしば幸福を、しばしば苦惱をあたえる選擇の自由の意識を、彼は行爲において持つであらう。その時彼が自分自身から世界史全體へと眼をやるなら、たとえ最も人間的なものが、その發展において力強き充實と洞察し難き交錯とを顯わすのを彼は觀るにせよ、その時始めて世界史全體は彼に親しみ深きものとなり、語りかけ得るものとなる。彼はしばしば彼自身の生活を決定的に規定した數多の偶然性も、彼自身を、そして彼自身に固有な資質を世界史へと擴大し、高めるものであることを再び見出す。……かくて彼にとつて世界史は、彼自身の發展を高めた謎、苦惱、暗黒をもつた巨人となる。(So wird ihm die Weltgeschichte zum Makroanthropos mit den gesteigerten Rätseln, Qualen und Dunkelheiten der eigenen Entwicklung) そして自分自身を發展せよという幸福感、自分自身の目的に向けられた創造を意識の中に目覺めさせる幸福感、これを多分彼は世界史から得て來るであらう。ヘーゲル、ブルクハルトが言つた如く、世界史は幸福について何ら語るところはないであらう。しかし個人が、世界史の

考察において自分自身と彼のささやかな要求を超えて行き得るなら、眞に世界史的に考察することを學びとるなら、より高次の、眞に謎めいた、しかし全く創造的な方に、歴史におけるすべての個體性の源泉に、彼自身の生命に感謝し、それらから湧き上つて來る感情が彼に充溢するであらう。客觀的精神の爲に思惟し、且創造するものすべてに、個體的發展という賜物があたえられるのだという認識は、この認識とは正反對の形而上學的な、宗教的な予感へと、ささやかな個體性をもつた我々こそより高次の賜物であるにすぎぬとの認識へと變貌して行く。<sup>(40)</sup>

ここに長く引用した彼の文章は、發展思想についての彼の最終的結論を、又歴史理論上の問題が必然的に世界觀的、形而上學的、宗教的問題になるという彼の思惟を典型的に示している。何故なら世界觀と宗教とは、窮極的に歴史的思想の根底に横たわつてゐるからであり、又このことは彼の思惟方法の根本特色であるから。以上の長き引用において多大の留保と迂余曲折にも拘らず力強く引かれた一本の太綱を感取するであらう。即ち個別的個人が眞に世界史に立向うとき、彼は世界史へと擴大せられ、高められて行くと同時に、彼自身もより高次の、世界史的力の賜物となるという主要モチーフが感得せられるであらう。個別的個人から出發して全世界的なものに到達し、又同時に全世界的なものによつて、個別的個人はその個體性の發展が賦與せられる。ここにおいて個から普遍へ、普遍から個へという關連を指摘することが可能であり、又巨人にも比せられた世界史を、我々は擬人化せられ、人格化せられ、個體化せられた最高の超個體的個體と把握することが可能である。奇妙な表現であるが、これこそ個體化された普遍である。このことは普遍の側に立つて言うなら、普遍の個體への低落と消極的意味を含めて言い得るかもしれないが、個體の側よりすれば、「個體化」という留保にも拘らず、積極的な意味において普遍の肯定である。



我々はここで未解決のまま取残して置いた問題、歴史の發展における垂直的次元と水平的次元の問題へと立戻らう。前者は、個別的個體性の核心たる自發性として、後者は、連續性の契機として把握されていた。確かに彼は歴史の發展の水平の次元において、この次元における發展の彼方へのみ窮極の目的を設定せず、そしてその目的から歴史の發展が規定されることを肯定せず、目的論的歴史觀と戰つた。しかし「人間的、歴史的發展には一義的に規定される目的への志向が缺けている。……だからといつてこの發展には目的への志向一般の目印し(das Merkmal der Zielrichtung überhaupt)が缺けてはいはしない、それが變化し交代しはするが、より内的な生命關連の連續性は失はれてはいはしない」<sup>(41)</sup>のであり、「一義的に規定された目的を個人の發展から期待し得ない以上に、歴史からも期待し得ない。だが歴史には目的一般が缺けているのではない」<sup>(42)</sup>のである。

歴史の水平的次元の發展の限界は世界史である。水平的にこれ以上進むことはできない。そしてこの世界史も個體化されていることを既に知つた。そしてそれは歴史における最高の個體性として他のすべての個體性を包容し、これら諸々の個體の發展が編み込まれ、歸するところであることも前述しておいた。そして個別的個體性の核心としての自發性の垂直的 orientation が何に向つて指向するかについて彼の敘述に従えば、「我々は神についてどのように考えていようとも、—神をば人格的或いは非人格的に觀念していようとも、又神という言葉を抹殺してただ至高な價值についてのみ語ることを敢えてしようとも—各人はそれぞれの瞬間において自分がこのような至高者のもとにあると感じてよいであらう。且つこれを感じることが強ければ強いだけ、それだけ—そう確實に自己の道を見出すであらう」<sup>(43)</sup>

マイネツケにとつて歴史理論と世界觀的な生の原理とは同じもの、というよりむしろ前者は後者によつて裏づけられ、

基礎づけられたものであつた。それ故歴史理論としての個體主義的歴史主義は、生の原理としても妥當する。歴史理論においても、世界觀においても徹底的に個體主義的歴史主義者であつた彼が、かような至高者として把握したものは、巨人にも比せられた世界史そのものでなければならぬ。かような世界史に垂直的に高まらうとする努力が、「我々を單なる生成の流れから引抜く」<sup>(4)</sup>のであり、垂直的 orientation による水平的 orientation の克服である。他面水平的次元における發展の窮まるところ、それは世界史であり、それはまた垂直的努力の志向するところである。この兩者が至高者としての世界史において統一せられ、一元化せられている。かような一元化、垂直的次元における世界史と水平的次元における世界史とが重り合うこと、かようなことを可能ならしめているのは、世界史を個體化したことに歸因するのであり、ひいては個體性に對する獨自の感覺に基いているのである。それは彼が個體性において指摘するところの、概念的、分析的には明らかにし得ず、論理化以前、現實化以前の内奥において、ただ予感的、追體驗、直觀的にしか把握できない神祕的核心的な實體を、歴史的に行爲するものに見出さんとする直觀行爲である。世界史もかような直觀行爲に把握せられて個體性となるとき、諸々の個體の發展をすべて自らの中に引き受けつつ、しかも自ら自身渾然たる統一體となる。かような個體化的方法は、ドイツロマンティカー達に、もつと根源的にはあらゆるドイツ的なものに内在する獨特のものであり、あらゆるものを「筆舌に盡し難き個體」<sup>(5)</sup>たらしめるものなのである。かような方法の歴史家に不可缺なるを説いて、歴史の發展の振幅と動搖にも拘わらず現存する目的、それを認識せんが爲に必要とする歴史主義的、個體化的直觀方法を次のような表現にても表明する。「イデーの發展を微視的眼差し(mikroskopisch Blick)にて眺めるなら、力強く振子運動を行い、ある時は此方、あるときは彼方と現象するが、それを巨視的に(makrosko-

pisch) に觀るなら、しばしば顯著な統一體を、矛盾と兩極の緊張關係において辨證法的に發展する人間的、精神的生の統一をあらわすのである<sup>(46)</sup>。

勿論微視的眼差しが不必要であると彼は言ひはしない。むしろこの兩者を兼ね備えることにより始めてすぐれた歴史家たり得るとなす<sup>(47)</sup>。ただ發展の窮極目的を觀るには巨視的眼差しにて達成せられ、微視的眼差しにては不十分であるのである。

我々はマイネッケにおける歴史の發展像を追求して、世界史という普遍に到達した。だがそれ故にそれは、外的完結體であるとは言ひ得ないことは勿論である。何故ならそれが矢張り個體性である限り、「個體性のあるところ發展あり。何故なら、個體性とは完了せるもの、確固として固定せられて定置せられたもの (ein Festgeltes) ではなくして、より内的な形成力の成果であり、活動している成果 (tätige Auswirkung innerer gestaltender Kräfte) なのである。かような成果が發展であり、かの内的力が生きていくかぎり、發展によつて個體性は自己をあらわす<sup>(48)</sup>」のであるから。しかしそれ以上の發展については彼の語るところではないし、又語り得ないであらう。

何れにせよ、彼は歴史主義者として世界史以上の普遍に進むことをしない。又この普遍も「個體化せられた」という留保を必要とする。そしてこのような留保こそ、歴史の發展を個體的なものから普遍的なものへと徹底化し、圖式化するることによつて、普遍が個體にあたえる暴力から個體を救出せんが爲に、個體に寄せる彼の愛なのであり、彼がヘーゲルの辨證法の主要部分を承認しつつ、最終的に反對せざるを得ないのも、「ヘーゲルの壯大な歴史哲學には魂の濫かさが缺けている<sup>(49)</sup>」と非難するのも、この留保の故なのである。それ故彼の發展思想を個體が優先する發展思想とも稱し得よ

う。

しかし超越的なもの、普遍的なもの、全體的なもの、法則的なものが強烈に要求せられている現代において、彼の限界について語ることは容易であらう。そしてクローチエは言うに及ばず、アントーニ、ホーフアからルカッチに到るまでそれぞれの立場からこれを指摘している。<sup>(50)</sup>彼の立場は個體主義 (Individualismus) という最も近代主義的色彩の濃いものであり、それを維持せんとしたのであるから、近代的なもの克服が強く叫ばれる現代においてそれは當然であらう。ただ彼は歴史主義を現代の問題に關係させながら、つねに現代の課題を自己の課題として、現代の問題に即しつつ行つたことである。<sup>(51)</sup>筆者が本稿において示そうとした如く、彼の歴史主義の普遍主義的なものへの傾斜もこのことの一端を物語る。そして彼が最後に到達した立場を、個體主義者として普遍の容認の限界まで行つたとも考えてよいであらう。しかし彼が克服せられねばならない點の多々存するは言うまでもない。その一つとしてO・ヒンツエの次の言葉で以つて本稿を閉じたいと思う、「歴史主義の重點を個體性のカテゴリーから、發展のカテゴリーへと移しかえねばならない。」<sup>(52)</sup> (一九五七・十一・二〇)

#### 註

- (1) Walther Hofer: *Geschichtsschreibung und Weltanschauung*, 1950, S. 412, 以下 (G.u.W. と略す)
- (2) Friedrich Meinecke: *Aphorismen und Skizzen zur Geschichte*, 1948, zweite Aufl., S. 69, (以下 Aphorismen と略す)
- (3) Meinecke: *Entstehung des Historismus*, 1936, Berlin und München, S. 171, (以下 E.d.H. と略す)
- (4) Meinecke: *Schaffender Spiegel*, 1948, S. 79, 以下 Spiegel と略す

- (5) Meinecke: E.d.H., S.171,
- (6) Meinecke: Aphorismen, S.72
- (7) Spiegel, S.59.
- (8) Meinecke: Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte, 1951, S. 35 ~ 36, (ドイツ Vom Sinn 七五七)
- (9) Spiegel, S.79.
- (10) E.d.H., S.8.
- (11) Meinecke: Schiller und Individualitätsgedanke, 1937, S.26.
- (12) E.d.H., S.181.
- (13) Spiegel, S.79.
- (14) Spiegel, S.79.
- (15) Ibid., S.73.
- (16) Vom Sinn, S.19.
- (17) Spiegel, S.13.
- (18) Ibid., S.14.
- (19) 十九世紀末ドイツ歴史學界を賑はした正統派の歴史家とランプレヒトとの間の論争で、マイネッケも正統派の側に立ち、ランプレヒトに論陣を張つた。これに關しては、ランプレヒト著、上原專錄譯「歴史的思考入門」日本評論社、p. 268 ~ 276. 參照。
- (20) (21) E.d.H., S.69.
- (22) Aphorismen, S. 75.
- (23) Vom Sinn, S.8.
- (24) Vom Sinn, S.8.

- (25) G.u.W., S.520.
- (26) Aphorismen, S.73~74.
- (27) Meinecke: Historische Zeitschrift 146, S.306, 頁 H.Z. に登載
- (28) E.d.H., S.449.
- (29) Otto Hinze: Troeltsch und die Probleme des Historismus, H.Z., 135, S.203.
- (30) Spiegel, S.221.
- (31) E.d.H., S.176.
- (32) Aphorismen, S.140.
- (33) Meinecke: Kausalität und Wert, H.Z., 135, S.17, 上の論文が Schaffender Spiegel に再録されたことなるの箇所は Spiegel に於てはつづる故原論文より補う。
- (34) Spiegel, S.79.
- (35) Ibid., S.221.
- (36) Schiller und Individualitätsgedanke, S.26.
- (37) E. d. H., S.222.
- (38) Aphorismen, S.83~84.
- (39) Spiegel, S.79~80.
- (40) Aphorismen, S.87~88.
- (41) Aphorismen, S.78.
- (42) Ibid., S.84.
- (43) Vom Sinn, S.20.

- (44) Ibid., S.19.
- (45) Ibid., S.57~58.
- (46) Aphorismen. S.84.
- (47) Ibid., S.85~86.
- (48) Ibid., S.79.
- (49) Vom Sinn, S.101.
- (50) このことと關して彼らの著書の中の箇所として指摘し得るが例として Benedetto Croce: Die Geschichte als Gedanke und als Tat, 1944, S.115. Carlo Antoni: Vom Historismus zur Soziologie, 1950, S.157~158, S.158~159, W. Hofer: G.u.W., S.544, G. Lukács: Zerstörung der Vernunft, 1954, S.439, S.446.
- (51) G.u.W., S.27~37. を参照
- (52) Otto Hinze: H.Z. 135, S.194~195.